

■活動の背景とねらい

ももの産地を今後も維持するため、若木の凍害による枯死防止対策の確立と、新たな担い手を確保することで産地力の向上を図る。

■本年度の取組と成果

1 ももの生産を担う担い手の確保・育成

定年帰農者によるももの生産組織（現在会員 20 名）を対象に、摘蕾、摘果・夏季管理、秋・冬季剪定の講習会を行い、栽培技術の向上を図ってきた。今後も引き続きレベルアップを目指して指導に力を入れていく。

また、新たにももの栽培を始めた I ターン就農者と就農予定者 7 名に対し、勉強会を 5 回開催した。さらに、新規就農者の確保につ



定年帰農者組織の剪定講習会

いては、受入れ体制のフローチャートを作成し、長野県・市町村・JA 合同就農相談会に参加し、新規就農者の誘致を行った。

2 若木の枯死防止対策の確立

(1) 樹体凍害の発生実態及び栽培管理実態の把握

JA ながの須高ブロックもも部会井上支部の 70 戸に樹体凍害の発生状況、冬季剪定時期、わら巻きの有無、秋季剪定の有無等のアンケートを実施した。アンケートの回収は 19 戸で、平成 26 年に比べ、わら巻きをする人の割合は 6 割から 8 割へと増加した。また、4 月まで巻いておく人も 6 割増えている。若木の剪定は 2 月以降の割合も 4 割から 8 割に増加している。これらからわら巻き等栽培管理に対する意識が変わってきていることが伺える。

(2) 秋季剪定の樹体に及ぼす影響調査

秋には剪定を実施せず、年明け直後に行う樹の樹体、樹勢調査を行った結果、秋に剪定をしない区はした区と比べて樹高は 13% 高く、新梢長は 15% 短い傾向が見られたものの大きな違いは見られなかった。

(3) 樹体凍害対策台木の実証

東福寺の台木試験ほ場で、ひだ国府紅しだれ台、払子台、おはつ台の樹体、着果量、果実調査を実施した。樹高は従来台木のおはつモモを 100% としたとき、払子台木 86%、ひだ国府紅しだれ台木 81% となった。また、7 月 12 日に管内の技術者を対象に凍害対策台木の検討会を開催し、20 名ほどの参加があった。

(4) 凍害防止対策現行技術の普及

9 月 8 日に秋季剪定の程度について JA 技術員 7 名を交え、秋季剪定の程度とわら巻き等の被覆資材について検討した。さらに、わらの確保や対策の周知のため、凍害啓発チラシを作成し、10 月上旬に JA グリーン長野 1000 枚、JA ながの須高ブロックへ 400 枚を配布した。その後わら巻き・防寒資材被覆講習会を現地でを行い、3ヶ所で 194 名の参加があった。

■今後の課題と対応

新規就農者の受け入れ体制を整えて担い手の確保を図るとともに、樹体凍害の要因をさらに調査する。



わら巻き・防寒資材の講習会

(技術係)